

『お寺の学校』 宗教の時間

お浄土 何一つ無駄にならない世界

■ただ「聞く」こと

『阿弥陀経』は、阿弥陀さまのお浄土の美しいありさまが示され、たくさんの仏さまがその教えをほめ讃えて証明し、阿弥陀さまの名前を称える称名念仏を勧める経典です。

まずは、このお経の特徴を知りましょう。

『阿弥陀経』には「舍利弗」という言葉が繰り返してできます。「舍利弗」とは、お釈迦さまのお弟子の名前です。才能と知恵に長けていて、常にお釈迦さまの話し相手となられていたことから、「智慧第一」と称される人です。『阿弥陀経』の経文は漢文でわずか1857字と、短いお経にもかかわらず、その登場回数は実に38回。そのうち36回は、お釈迦さまが「舍利弗さんよ」と呼びかける言葉で、この構成が一つの特徴です。

また、多くのお経はお釈迦さまとお弟子との問答で構成されますが、『阿弥陀経』では舍利弗さんがお釈迦さまに「問い」を発せられないのも特徴です。お釈迦さまが「舍利弗、於汝意云何（舍利弗さん、どう思う）」と言っても舍利弗さんは黙ったまま。なぜ、舍利弗さんは何も言葉を発しないのでしょうか。

宗祖・親鸞聖人（1173～1263）が七高僧の一人として仰がれた中国の善導大師（613～681）は、お釈迦さまが「舍利弗さんよ」と呼びかけられたのは、苦悩にあえぐ私たちすべてのものに向かって呼びかけられたのであって、舍利弗さんは私たちを代表しているのだと説いています。また大師は、舍利弗さんの知恵は人間の中で最高といえるけれど、その知恵をもってしても、とうていはかり知ることができない深い真実が阿弥陀さまの智慧であり、お浄土である。究極の真実というものは、私が愚にかえって聞くほかないものであることを示されている、と解釈されました。

つまり、『阿弥陀経』の根底に説かれているのは、お浄土に生まれるのに私たちのほからは必要ない。ただ阿弥陀さまのはたらき（本願他力）を聞くほかないということです。すなわち、「ナモアミダブツ」を聞くということです。

終始、黙ったままの舍利弗さん。「私は愚痴の心から離れられない身。まずそのことを心にとどめてお釈迦さまのお説法をただただ聞かせていただこう」。そんな思いでじっと耳を傾けていたのかもしれない。